

アラスター・ラム著

『カシミール——未解決の遺産

1846～1990年——』

Alastair Lamb, *Kashmir: A Disputed Legacy 1846-1990*, ハーティングフォードベリ, Roxford Books, 1991年, xiv+368ページ

堀本 武功

I

カシミールは、1990年以降におけるテロ活動の活発化や人権問題の深刻化などにより、改めて、印パ国内はもとより国際的な関心を集めている。こうした情勢を背景に、最近、カシミール問題関係の著作が続々と刊行されている<sup>(註1)</sup>。

本書もそうした著作のうちの一つである。著者のラムは、印パ関係および印中関係などを研究領域<sup>(註2)</sup>とし、カシミール問題については1966年に *Crisis in Kashmir*<sup>(註3)</sup> を刊行している。本書はラムによる同一テーマの第2作目であるが、第1作の刊行以後に開示された印パの分離独立前後の時期におけるイギリス政府所蔵のインド関係文書集をはじめ、各種の新資料を活用しており、その結果、カシミール問題の発生原因については第1作とは違った結論を下しているという(vii ページ)。本書は、本文だけで343ページに達する膨大なものであるが、全体の構成を理解するためにその章立てを掲載しておこう。この章立てから明らかかなように本書は、1947年の分離独立までとその後の2つの時期に分けてカシミール問題を論じている。

第1部 1846年の起源から1947年まで

第1章 まえがき

第2章 ジャムーン・カシミールおよび1846年から1947年までのインド藩王国

第3章 ジャムーン・カシミールおよび英領インドの防衛：北方辺境の問題……第1部

第4章 ジャムーン・カシミールおよび英領インドの防衛：北方辺境の問題——第2部

第5章 インドへの権力委譲前夜におけるジャムーン・カシミール政治

第6章 1947年の分割

第7章 1947年の編入

第2部 1947年の紛争から90年まで

第8章 まえがき

第9章 第1次カシミール戦争および1947年から64年までの国連介入

第10章 1947年から65年までのジャムーン・カシミールの内部情勢

第11章 印パ直接協議および1949年から65年までの冷戦の影響

第12章 1965年の第2次カシミール戦争

第13章 1966年のタシケントから72年のシムラまで

第14章 1972年から82年までのシェイク・アブドゥッラー

第15章 1977年から90年までのジャムーン・カシミールにおけるインドの失敗

第16章 むすび

II

第1部第1章において、ラムは、カシミール問題の持つ意味について「カシミールは、印パ両国の外交政策を形成するうえで重要な要因であったと言えるし、また、両国内政のあらゆる側面に影響を与えたことは間違いなからう」(2ページ)と論じている。この点については、異論のないところだろう。

第2章では、ジャムーン・カシミール(以下、JK)州の成立経緯が説明されている。まず、シク王国のランジート・シン(Ranjit Singh)が1820年にドーグラ王ニグラーブ・シン(Gulab Singh)をジャムーン国のラージャとして認知したことが後のJK藩王国の出発点であるとする。グラーブ・シンは、第1次イギリス・シク戦争において中立を保持した功により、1846年、シク王国が手放したカシミール渓谷をイギリスから750万<sup>ルピー</sup>で入手し、さらに彼自身とその後継者は、19世紀

の後半以降、ギルギット、フンザなどの北方辺境を支配下におさめ、ここにカシミール藩王国が成立した、という。

続いて、ラムは、カシミールの人口構成、経済的・地理的状況などを検討したうえで、印パの分離独立に際してカシミールはパキスタン側に編入されるべきであったと指摘している。この見解は、本書に一貫して見られるラムの反印・親パ的な立場の基礎となっていると思われる<sup>(註4)</sup>。

第3章および第4章は、19世紀後半以降におけるイギリスのインド防衛政策がインド亜大陸の北西辺境からロシアの影響を排除することを目的としていたとの観点から、論述されている。特に、第4章では、北方辺境をめぐるイギリスと帝政ロシア（次いでソ連）の角逐に中国が加わった争いという文脈において、JK州の地政学的意義が綿密に論じられている。全体として、3国の争いは、それぞれの中央アジア政策を反映したものである、とされる。そして、1947年後半における独立インドによるJK州の獲得は、インドが中央アジアにおける足場を築こうとしたものであった、との可能性を強く示唆している（75ページ）。

恐らく、ラムが本書の第1部において主張したいことは、分離独立までのカシミール問題が中央アジアをめぐる英露の角逐、すなわち「ザ・グレート・ゲーム」<sup>(註5)</sup>の観点から分析されるべきである、という点であろう。換言すれば、北西インド地域の戦略的意味あるいは中央アジアへの足掛かりとしての北方辺境が持つ地政学的な意味の重視である<sup>(註6)</sup>。

しかし、それでは、当時のイギリスがそれほどまでに重要な位置を占めるカシミールをなぜ英領とせず藩王に対して売却したのか、との疑問が生ぜざるを得ない。ラムは、この点について「政府は、1846年時点では北方辺境の構造をまだ良く知らなかった」（19ページ）とイギリスを弁護している。19世紀後半頃から始まった中央アジアおよびその周辺をめぐる英露の角逐は、1907年に締結された英露協商により一応の幕を閉じる。カシミール問題を英露の争いの観点から描こうとするのであれば、ラムはこの辺りの状況の推移をもう少し詳しく描写すべきではなかったろうか。

第5章から第7章までは、1930年代から印パの分離

独立に至るカシミール問題の推移が描かれている。1931年に藩王によって引き起こされたと言われる反ムスリム策謀事件の概要（この事件は「現代カシミール政治の出発点」〔88ページ〕となった）、この事件に係わったシェイク・アブドゥッラー（Sheikh Abdullah）によるムスリム会議の結成（32年。その後の国民会議）をはじめ、印パの分離独立、47年のカシミール藩王国のインドへの編入が要領よく論述されている。

これら3章のうち、分離独立を扱った第6章における2つの指摘が興味を引く。ひとつは、マウントバッテン（Lord Mountbatten）は、表向きは藩王が今後のJKのあり方を決められるとしていたが、権力委譲後におけるカシミール独立を好まず、実際にはインドへの帰属を選択する可能性の高かったアブドゥッラーの国民戦線に決定させたいと考えていたのではないかと、とのラムの推論である。ラムによれば、そうすることが、政治的にだけでなく、地政学的に見ても、北方辺境の防衛をインドが担当するという望ましい形になるからである、と言う。もうひとつのポイントは、グルダスプールの印パへの分割問題である。ラムは、イギリス人のラドクリフ（Sir Cyril Radcliffe）を長とする国境委員会がムスリム多住区のグルダスプールの東部3地区をインド側に帰属させる裁定を下したのは、インドとカシミールとの交通を維持するためにおこなわれた決定で、司法的判断というよりは政治的なものだった、と推論している。

これら2つのポイントは、イギリスが分離独立当時、戦略的見地から、元々、カシミールをインドに帰属させようと考えていたことを示すものである、とラムは指摘している。しかし、マウントバッテンの意向はさておき、ラドクリフ裁定がおこなわれた1947年8月の時点では、藩王は帰属問題について最終的な決定を下してはいなかったものであり、ラムの推論は些か「読み過ぎ」の印象を与える。

### III

第2部では1947年から90年までの状況を扱っている。第2部のまえがきに当たる第8章では、2つの興味ある新事実に力点が置かれている。

ひとつは、インド外交部の1947年10月25日付アトリ一首宛て覚書である。イギリス政府開示文書である同覚書の内容は、インドがイギリスの真の後継者としてインド亜大陸を守るべきであり、北西亜大陸の防衛の要に位置するカシミールがインドに帰属することは当然である、という趣旨である。この覚書は、前述したマウントバッテンの意向と同様にイギリスの本意として引用されている。

もう1点は、カシミール問題に関するインド政府の年来の主張、すなわち藩王が侵入勢力に対処するためにインドに加入してその支援を求めたという主張を否定するものである。ラムによれば、パティアラ藩王国軍に変装したインド軍が1947年10月17日にはすでにスリナガル市に到着して飛行場を防衛しており、だからこそ、インドは同月22日に始まる侵入勢力の攻撃に十分対応することができたのだという。

次の第9章、第10章および第11章は、第1次印パ戦争から第2次印パ戦争（本書では、それぞれ第1次カシミール戦争および第2次カシミール戦争）までの時期を扱っているが、同じ時期を別々の主題に分けて論じているため、カシミール問題の全体的な流れが把握しにくく、また、目新しい視点からの分析も少ない。

ただ、第9章で注目に値する点は、従来のカシミール研究が国連の関与を重視しすぎた傾向に警告を発していることである。国連重視の背景についてラムは、カシミール問題が創設間もない国連にとって最初の国際紛争処理案件だったこと、また、国連がカシミール問題について膨大な文書を刊行したためであろうと推測している。カシミール問題の本質は、「……安保理の審議にあるのではなく、印パの内政にある」（164ページ）というラムの指摘は的を得たものである。

第11章は、カシミール問題をめぐる印パ直接協議が世界的な冷戦突入状況においてその影響を受けざるを得なくなった経緯を論述している。この中で興味を引くのは、ネルーが国連調停のひとつであった「ディクソン提案」（＝地域的住民投票）に対して1953年辺りから興味を示さなくなった理由の説明である。ラムは、その理由として、(1)地域的住民投票がインド国内にヒンドゥー・ムスリム紛争を招きかねず、その当時、危険を冒す必要はなからうと判断したこと、(2)パキスタ

ンが反共ブロックに加盟することによってインドに対して有利な立場に立つことを嫌ったため、と推測している。

第12章および第13章は、第2次印パ戦争とタシケント宣言を扱っている。この辺りでは、ラムのインド批判の色彩が濃厚である。たとえば、第2次印パ戦争の前兆としての印パ関係の悪化は、カシミールのインド化を進めたインド側に非があるとし、「1963年以降、インドが、遅かれ早かれ、インド側の全JK州をインド連邦のもうひとつの州として編入し、そうすることによってカシミール問題が決着したと一方的に宣言しようとしていた」ことにあった、と断言している（247ページ）。インド化の具体例として、JK州割当ての連邦下院議員の直接選挙、JK州に特別な地位を与えた「憲法第370条の漸進的な侵食が進行中」とのネルー発言（1963年）をあげている。しかし、パキスタンにおいても、アーザード・カシミール（Azad Kashmir）はアユーブ・カーン大統領の「基本民主制」に組み込まれており（1960年）、ラムの批判は一方的との印象を受ける。

また、第2次印パ戦争に触れた箇所「インド軍は、1965年9月6日、インドが戦争宣言またはその他の警告もなく印パ国境を越えてラホールに向けて進軍した」（262ページ）と記述している。しかし、タシケント宣言すら戦争の開始を8月5日とし、両軍が8月時点の地点に戻ることをうたっている。この辺りの著者の論述は、あたかもパキスタン政府の刊行物を読んでいるかのような印象を与える。

ただ、第2次印パ戦争に関連して興味を引くのは、「ジブラルタル作戦」に関する言及である。このネーミングは、8世紀にジブラルタル海峡を越えてスペインに攻め入ったムスリム指導者の故事に因んだものである。ラムによれば、この作戦は、ブットーが中心となって策定されたもので、JK州内に反乱を起こさせるとともにパキスタン・ゲリラを送り込み、最終的には、パキスタン軍を参加させ、カシミール渓谷からインド側勢力を一掃するか、または、インドから譲歩を引き出そうとするものであった。しかし、JK州内に反インド運動が高揚するような情勢がなかったことやインド側情報部が計画を事前に察知したために中止さ

れた、という。この作戦は、第1次印パ戦争の際にも検討されたものであった(125ページ)。

ジブラルタル作戦は、後のパンジャブ州やJK州におけるテロ活動へのパキスタンからの支援を想到させるものであろう。ラムは、別の箇所でも、シク教徒やムスリムが非公式にパキスタンから援助を受けているとしても「パキスタンの政策は、インドを不安定にすることではない」(340ページ)と述べているが、ジブラルタル作戦的な発想がパキスタン側に連綿として存在することはラムの主張を否定する根拠となるのではないか。

第13章では、タシケント宣言から第3次印パ戦争(バングラデシュ独立戦争ともいう)に至る状況分析である。ラムは、1966年のパンジャブ州創設がシク教徒の分離運動を促進した結果、インド政府は分離主義傾向のあるカシミール問題で譲歩しにくくなったと見ている。また、カシミール内のムジャヒディンの背後にはパキスタンが存在するとのインド政府の認識があるが、第2次印パ戦争の際に、1990年頃に見られるようなJK州のムスリムのムジャヒディンに対する同情があったとしたら、インド当局がJK州の情勢をコントロールするのは困難だったろうと述べている。

一方、第3次印パ戦争へ至る経緯について、その発端となったインド国内航空機ハイジャック事件(1971年1月)はインド側が仕組んだものである、とラムは主張する。インド政府は、この事件をきっかけに東西パキスタン間インド上空のパキスタン機の飛行を禁止した(2月)。その結果、自国の安全保障に不安感を抱いたパキスタン軍は、東パキスタンに軍を増強して鎮圧をおこない、それがさらに東パキスタンにおける反西パキスタン運動の激化を招いたとする。ラムは、インドはこの機会に東西パキスタンを分断しようとしたのだ、と主張する。

続く第14章は、シェイク・アブドゥッラーの復権からその死去およびファルーク・アブドゥッラー(Farooq Abdullah)の継承に至る経緯を述べたものである。第15章は1977年以降90年までのカシミール情勢を分析したものである。1977年は、ファルーク・アブドゥッラーが州議会選挙において勝利を収め、一方、パキスタンではジア・ウル・ハクがクーデターで大統領

領の座についた年である。ラムは、この時点におけるカシミール情勢について、(1)パキスタンが自国の安全保障の観点から隣地のJK州における情勢に無関心ではありえないこと、(2)カシミールに「強い」シェイク・アブドゥッラーに代わる政治家がいなくなったこと、(3)インド政府の弱体化、すなわち、インディラ・ガンディーの退場、シク分離主義の台頭、(4)イラン革命、ソ連のアフガニスタン進攻が南アジアのムスリムに与えた影響などの観点から分析している。一応、妥当な情勢分析であろう。

今後のカシミールについてラムは、カシミールが事実上、ジャムー、ラタク、プーンチ、北方地域、カシミール渓谷などの諸地域に細分化されてしまったことやカシミール渓谷におけるテロ・グループであるジャムー・カシミール解放戦線(JKLF)やヒズブル・ムジャヒディン(Hizbul Mujahidin)などの跋扈を指摘し、1947年の最初に戻って議論するのはもはや不可能であるが、「今日、亜大陸の政治家が(こうした現実を——引用者)十分客観的に判断できるだろうか。多分、できまい」(343ページ)との悲観的な見方を示している。

#### IV

本書を通読して気になる点は、著者ラムの親パ・反印的な立場である。この点については、本書の中でアーザード・カシミールが抱える問題にまともな言及がなされていないことによっても確認できよう。アーザード・カシミールは、パキスタン国内ではいわば属領的な地位にあると言われ、パキスタン政府のカシミール問題への最大のアキレス腱である。もしラムが印パ両国の立場の相違に十分配慮していたならば、本書はカシミール問題研究史に金字塔を打ち建てたとの評価を獲得したであろう。

また、せっかく、第1部においてカシミールの地政学的な意味に注目するというこれまでのカシミール問題研究には見られなかった重要な視角を提示しながら、分離独立以降を扱った第2部においてはこの視角が等閑視されている。カシミールが中央アジアにおいて持つ戦略的な意味は、今日においてはさらに強まっている

と思われる。この他に気になる点は、カシミール問題がインド内政上の最重要課題であるセキュラリズムやコミュニナリズムに対して持つ意味について言及されていないことである。

とは言え、これほどまでに資料を渉猟し、優れた視角を提供した本書は、制約を持ちつつも、カシミール問題研究にひとつの決定版を送り出したと言って過言ではあるまいし、ラム個人にとってはこれまでの研究の一応の総括という意味を持っているのではないだろうか。

(注1) 国外刊行では、Jagmohan, *My Frozen Turbulence in Kashmir*, ニューデリー, Allied Publishers, 1991年/Akbar, M. J., *Kashmir: Behind the Vale*, ニューデリー, Allied Publishers, 1991年/Deora, M. R.; R. Grover 編, *Documents on Kashmir*, ニューデリー, Discovery, 1991年/Thomas, Raju G. C. 編, *Perspectives on Kashmir: The Roots of Conflict in South Asia*, ボールダー, Westview Press, 1992年, などがあり, 国内刊行では, 堀本武功『70年代以降のカシミール問題』外務省 1992年がある。

(注2) たとえば, Lamb, A., *The China-India Bor-*

*der: The Origins of the Disputed Boundaries*, ロンドン, Oxford University Press, 1964年/同, *Asian Frontiers: Studies in a Continuing Problem*, ロンドン, Pall Mall, 1968年/同, *Tibet, China & India 1914-1950: A History of Imperial Diplomacy*, ハーティンフォードベリ, Roxford Books, 1989年, などがある。なお, ラムは, *Tibet, China & India*……, の著者紹介によれば, ケンブリッジ大学で博士号を取得したのち, マラヤ大学やオーストラリア大学などで教鞭を執った後, ハットフィールド・ポリテクニクの助教授(reader)となっている。

(注3) Lamb, A., *Crisis of Kashmir 1947-1966*, ロンドン, Routledge & Kegan Paul, 1966年。

(注4) このラムの立場は, カシミール問題に関する前作でも見られる。

(注5) Hopkirk, Peter, *The Great Game*, ロンドン, John Murray, 1990年, においては, 1850年代から1900年初頭に至る内陸アジアをめぐる英露の争いがビビッドに描かれている。同書は, 京谷公雄訳により『ザ・グレート・ゲーム』(中央公論社 1992年)として刊行されている。

(注6) このような視点は, Lamb, *Crisis*……, の第1章および第2章において論述されてはいるが, 議論の枠組としては提示されていない。

(国立国会図書館)

訂 正

本誌前号(第34巻第4号)所載の市川誠「フィリピンの公立学校における宗教教育, 1901~87年」中に, 下記の誤りがありましたので, お詫びして訂正いたします。

	誤	正
21ページ右段 上から15行目	その他の職員は	その他の者は
24ページ右段 上から22行目	その他の職員は	その他の者は
同. 25行目	その他の職員は	その他の者は
28ページ左段 下から4行目	私は……, この	私は……, その
32ページ右段 上から21行目	Nationalista	Nacionalista
36ページ左段 上から8行目	hilippine	Philippine
同 9行目	特別会期開催	特別会期開會